

■高校野球のケーススタディー（第45回）■



一般財団法人兵庫県高等学校野球連盟

高校野球における公式試合や練習試合の中で生じたプレイの中で、“こんなプレイ、ルールではどうなるの？”といった疑問について、ルールの側面から解説します。

○ 春季県大会を振り返って

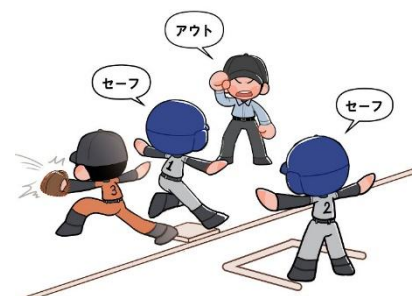
今大会はDH制度を適用した最初の大会となりました。全36試合（延べ72チーム）のうち、5.11(a)を使用したチームが51チーム、5.11(b)を使用したチームが7チーム、DHなしが14チームという結果でした。また、DH消滅を伴う複数交代時には通告シートを活用することで、大きなトラブルなく終了することができました。

さて、今大会の中で、マナー面として気になった2点「セルフジャッジ」と「捕手のブロックサイン禁止」について、再周知を図りたいと思います。

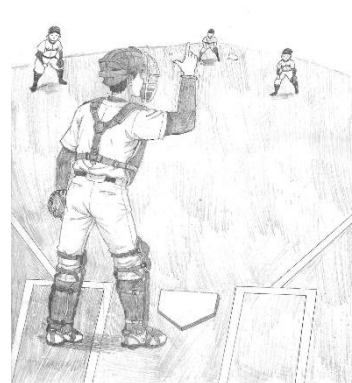
この2点は1998年に日本高校野球連盟から試合をスピーディーに進行させるための「マナーの向上と遅延防止」の一環として指導要綱に盛り込んだことが始まりとなっています。兵庫県では、各大会前の抽選会で『規則・マナーに関する注意事項』という資料を配布し、審判委員が説明を行っています。その中の〈重点指導事項〉に「セルフジャッジ（発声・ジェスチャーを含む）をしないこと」が記載されています。また、兵庫県高校野球連盟HPでも「高校野球のマナーとルールを学ぼう」第17回で取り上げていますので、内容を抜粋します。

『正規の判定者がいるにも関わらず、別の判定者がいるような状況を、たとえ何気なくだとしても作り出してはいけません。高校野球では規則書表示の「審判員」ではなく、「審判委員」として「委（ゆだ）ねる・委（ゆだ）ねられる」ことの意味を大切にしてきた伝統があります。試合前の本塁を挟んだ両チームと審判の挨拶は「F精神」の確認と同時に、「審判を任せる・任せられること」への緊張の場面なのです。高校野球というスポーツは、日常の大切なことを試合や練習を通して学び、研鑽（けんさん）する場ではなかったでしょうか。そのためにも、人に任せることの謙虚さ、任せられることへの尊さを共有したいものです』

時代の変化とともにこの夏の甲子園大会から新たにビデオ検証が導入されます。正しい手順で判定の確認を要求することは可能になりますが、改めて上記の精神を理解して取り組んで欲しいと思います。



また、「捕手のブロックサイン禁止」については、改善が見られていたことから、一昨年から「規則・マナーに関する注意事項」からは削除していました。しかし、今大会では捕手がブロックサインを行うケースが散見され、残念でありました。規則・マナーに関する注意事項に記載されていないからではなく、引き続き周知徹底事項として守って貰いたい事項です。この「規則・マナーに関する注意事項」は、日本高校野球連盟から毎年発出される〈重点指導事項（本年より「高校野球で大切にすること」）〉と2年に1度配布される「高校野球審判の手引き」に記載の〈大会運営上の留意事項 周知徹底事項〉から現状を踏まえ県内に向けて発信すべき事柄をピックアップした内容になっています。その中で『捕手のブロックサインは禁止する』ということが記載されています。



「規則・マナーに関する注意事項」については、大会前に改めてチーム全体で確認頂き、平時から練習試合等で実践するとともに、規則とマナーを守った模範的な試合に取り組んで欲しいと思います。

表題デザイン・イラスト協力：兵庫県立姫路工業高等学校デザイン科
表題デザイン：桂 楓杏さん（74 回生）
イラスト：田村 友佳さん（3 年）大谷 真凜さん（3 年）